よび平壌高等普通学校が1911年に設立され、それ以降各道に設置されていった。そして1924年に江原道（春川高等普通学校）および忠清北道（清州高等普通学校）に設置されることにより、朝鮮13道すべてに官立高等普通学校が設置されることになった。なお、これら官立の高等普通学校は1925年度にすべて公立化し、以後運営された。1937年までには、16校が設置され、京畿道、慶尚南道、平安南道という、植民地朝鮮における三大都市（京城・釜山・平壌）を擁する道には各2校が配置されている。

表２　金泉郡内の初等教育機関状況（1922年）

	校数	生徒数	学校比率	生徒比率
公普	5	1,306	4%	35%
私立各種	4	191	4%	5%
私設学術	23	968		
国語夜学	6	380		
小計	29	1,348	25%	37%
書堂	68	646		
改良書堂	8	195		
小計	76	841	67%	23%
総計	114	3,686	100%	100%

出典：『慶尚北道教育及宗教一班』1922年版。
注：公立普通学校に付設された明倫学校は、詳細が不明なため、表には含めていない。

一方で私立高等普通学校は、1937年までに11校設立されているが、そのうちの6校が京畿道に集中しており、平安南北道に各1校ずつ、咸鏡南道に1校、全羅北道・慶尚北道に各1校となっている。公私立をあわせた27校の分布状況を見ると、京畿道8校、平安南道3校、慶尚南道・慶尚北道・全羅北道・平安北道・咸鏡南道が各2校ずつで、他の6道には1校ずつしか存在しなかった。

本稿が対象とする慶尚北道の場合、大邱高等普通学校（官立）が1916年に設置された後、1931年になってようやく金泉高等普通学校（私立）が設立されたことになる。

3　青年会運動と高等普通学校設立期成会

（1）金陵青年会の結成と金陵学院

金泉の朝鮮人青年団体として、1921年8月29日に金陵青年会が結成された[15]。同会会長に選ばれたのは当時37歳頃と思われる高徳煥である。後の高等普通学校設立期成会の中心メンバーであり、「受任五理事[16]」の一人となった人物である。高徳煥は、漢城で1884年頃生まれ、1902年に京城学堂を卒業した後、私立学校教師や郡主事（統監府期）、総督府忠州郡書記（併合後）などを経て、1915年頃金泉に「転任」で移り住んだ人物だった。1920年に「官界」から「実業界」に転身し、その後金陵青年会を組織し会長に就任している。『東亜日報』（1925年2月9日）記事によると、「急転する思潮に深く感じるところがあり、日常会う人毎に朝鮮民族の将来のために決起してくださいと懇願してきたが、ついに当地有志達と手と手をとり万難を排し、大正十年八月二九日に金陵青年会を創設すると同時に同会長に被選され」たと紹介されている。三・一独立運動後、各地に多くの青年団体が結成されたが、金泉の朝鮮人青年の多くを組織したと思われる金陵青年会の中心人

15　『東亜日報』1925年2月9日。
16　金泉高普設立に際してつくられた教育財団法人の理事5人に対する呼称。高徳煥、金鍾鎬、李漢琪および崔松雪の親族2名で構成された。

物が、漢城生まれで、10 年代に仕事上金泉に移り住んだ「外来」の人物だったことが注目される。青年会が発足して 10 日目には、「林槿氏の来泉を利用して」同会主催の講演会が開催され、200 余名の会員その他一般聴衆が集まり「無限の好感を与えた[17]」と記されるなど、地域社会で活発な活動を展開している。

青年会の組織としては、1922 年 3 月に開かれた「定期総会」を見ると、会長・総務・文芸部・矯風部・運動部・庶務部、そして評議会が置かれていた。会長・総務（各 1 名）の下、四つの部局それぞれに「幹事」が 2 名ずつ選ばれており、評議員は 7 名であった。金泉高普「受任五理事」となる高徳煥はこの時会長に、李漢麒は文芸部幹事に、ともに「再任」されていた[18]。

上記の定期総会が開かれた場所は、金泉公立普通学校であったが、約半年後の 1922 年 10 月に開かれた臨時総会は「新築会館」で行われた。青年会を組織して約 1 年 2 カ月後には、金泉郡庁が置かれた植民地行政上の郡の中心部ともいえる南山町に、独自の建物として、「金陵青年会館」を建設していたことが確認できる。またこの臨時総会では、諸般会務の報告とともに、「評議員」と「運動部」幹事の補欠選挙が行われ、選ばれた評議員 4 名の名前の筆頭に「受任五理事」の一人である、金鍾鎬が挙げられていた[19]。

金陵青年会はこの青年会館の落成式を会結成「1 周年紀念式」とあわせて、1922 年 11 月 12 日に大々的に挙行した。落成式が行われる 4 日前に『東亜日報』は、「当日は講演会があり運動会も開催されるという」と報じている[20]。実際には、落成式前日の夜にも、「特別大講演会が開かれ盛況を呈」し、また当日には、「会員は勿論当地有志と各地方青年団代表が多数出席し遠方からは祝電及び祝賀状が殺到し盛況を呈し[21]」たと伝えられた。地元社会や周辺地域の大きな関心を集め、他の地方の青年団体代表も参席し、遠方の団体などとの関係も持っていたことが確認できる。

なお、この金陵青年会館は「コンクリート」でつくられた 2 階建ての建物であり、この費用は、「会員の捐出した金額と其外有志諸氏の熱い同情金で」賄われたとされており、青年会の会員の広がりと有志の関心の高さがうかがえる。会館落成記念式当日の写真が残されており、これを見ると 2 階建ての会館は、中央部にバルコニーがあり、洋風の窓を持つ非常に近代的な建物であり、建物周囲には敷地が広がっていた[22]。

金陵青年会はこの金陵青年会館を使い、金陵学院を開設していく。『東亜日報』（1923 年

17 『東亜日報』1921 年 9 月 12 日。なお、1923 年には、同会主催の「討論会」が 3 月に「第 3 回」として 5 月には「第 6 回」として開催され、「数百名の聴衆で大盛況」と報道されている（『東亜日報』1923 年 3 月 24 日、同年 5 月 24 日）。

18 『東亜日報』1922 年 3 月 31 日。

19 『東亜日報』1922 年 11 月 8 日。

20 同上。

21 『東亜日報』1922 年 11 月 20 日。

22 『東亜日報』1925 年 2 月 9 日。なお『金泉市誌』（金泉文化院、1989 年、805 頁）によれば、出典が明記されていないが、この会館は 100 坪だったという。また、同学院の写真資料として、松雪同窓会、金泉中・高等学校『松雪六十年史』1991 年、255 頁に掲載されたものがあり、学院敷地の存在が確認できる。

1月29日）によれば、1923年1月に金陵青年会で「金陵学院設立の件」について幹部会が開かれ、「学院に関する諸般事項を決定」していた。その中で、同年4月1日に金陵学院を開学することが決められ、金陵学院の「委員」として、高徳煥・李漢麒・李永局・白鍾基・李馨遠の5名が挙げられている。なお、これら全委員は、前述の1922年3月の金陵青年会定期総会で、青年会役員に選出された者たちであった。[23]

こうして、金陵青年会館建設の翌春から金陵学院を開学するため、1923年3月中旬には、「初等科百人・中等科百人・高等科百人」計300人の生徒を募集し、「3月20日に入学試験を行う」と新聞報道されている。[24]「入学試験を行う」とは、就学希望者の多さや、一定の教育水準の設定など「学校」形式を整えようとしていたことのあらわれだと思われる。

翌1924年春の新学期には普通科が3学年制で3クラス、高等科2学年制で2クラス、あわせて5クラス230名（新規および補欠）の募集があり、初等科は普通学校程度の教育を行う設定だったと思われる。[25]

1924年度末ともいえる1925年2月に金陵学院では、24年春に募集した生徒数230名より多い普通科224名、高等科36名計260名の生徒を教育していたことが、『東亜日報』（1925年2月9日）で報じられている。学院長は高徳煥であり、「担任教員として李永局と朴元錫の両氏がいる」と紹介されている。高徳煥が教壇にも立っていたとすれば、教員3名で260名の教育を行っていたことになる。同記事は、「東亜日報記者地方巡回――正面側面から見る金泉の表裏」というタイトルで第4面で特集が組まれたものであり、同面には「斯界有志歴訪記」として、筆頭に「思想界」では高徳煥、「教育界」では李永局に対する取材記事が掲載されている。その中で李永局は、「100余名の学童を引導」していると記されており、また、金陵学院創立以来「純全に同学院を担任し、報酬もないがただ我民族のために献身しようという熱烈な誠意で今日まで同学院のために」努力してきたと高く評価されている。李永局が、高徳煥とともに、金陵学院開始以降約2年間教員を務めており、教育界の人物としてただ一人取材されていることからも、同学院教員の中核だったことが推測される。同氏はまた、「家族20余名の執権者」であるにもかかわらず、1923年までの「俸給生活」を捨てて、無給で同学院の教員としてのみ働いていた。『東亜日報』記者の同氏へのインタビューが以下のように紹介されている。

> 「いつまでも教鞭だけをとり続けるおつもりですか」記者のこのような問いに対して氏は敬虔な態度で「元来もっているものが裕福でないために金銭ではたとえ志を果たすことができなくても、（中略）身をもっている以上、肉体ででもわが民族のためにはもっとわが子孫の教育のためにどこまででも提供します」[という―引用者]氏の堂々とした数語を聞いただけでも、すでにその熱意の渦中に巻き込まれてしまう。

23 『東亜日報』1922年3月31日。会長が高徳煥、文芸部幹事が李漢麒・李永局、評議員が白鍾基・李馨遠となっている。

24 『東亜日報』1923年3月15日。

25 『東亜日報』1924年3月13日、1927年9月1日。

なお、金陵青年会では幼稚園教育も行っていた。同記事で「金陵青年会経営」として「金陵幼稚園」が紹介されている。金陵青年会館内にあり、「大正 10 年春頃に設立されたもので、現在児童数が男女合わせて 50 余名だという。担任者としては園長に李正得、園監に李茂林両氏とその下に専任教員張福姫女史がいる」と紹介されている。これによると、幼稚園開始時期が金陵青年会設立（1921 年 8 月）より早い 1921 年春となる。25 年のこの「回想的」記述のみではその開始時期を確定できないが、その創始者は高徳煥氏であったようである。ただし幼稚園開始時期に関連して、金陵学院が 1923 年 4 月に開学する以前の『東亜日報』（1923 年 1 月 21 日）記事で、

> 金陵青年会の（中略）金泉幼稚院（ママ）は良好な成績を収めてきており、今年に至っては加えて一層拡張しようと有志諸氏の多大な同情が有るところだ

と、紹介されており、少なくとも 1922 年には開設され、金陵学院に先行して運営されていたことは確実である。こうした諸事実は、金陵学院が幼稚園事業から発展して運営されたと見ることもでき、興味深い。そもそも「幼稚園」は、「近代学校」の初等教育を下支えするものとして、その「近代性」ゆえに伝統的な「書堂」と対極的な性格を持つと思われる。当時、これは金泉唯一の朝鮮人対象の幼稚園であった。なお、同報道には、幼稚園への寄付者 23 名の名前と、それぞれの寄付金（1 円～ 10 円、総額 43 円）が載せられている。李永局が 1 円を、そして後の金泉高普「受任五理事」の高徳煥・金鍾鎬・李漢琪が 2 円および各 1 円を寄付していた。金泉高普設立運動を推進することになる者たちが、幼稚園教育にも関心を持ち、また青年会運動の中心メンバーだったことが確認できる。

1925 年 2 月段階で、金陵青年会が運営する金陵学院および金陵幼稚園は、教師数 6 名（校長を含む）、生徒数 310 名余りと規模の大きい教育機関であった[26]。

一方、この 1925 年 2 月の記事では、当時金泉郡全体で「私立学校が 4 個所あり、幾分教育難を緩和しており、兼ねて其中では家勢の関係で上級学校に行けない児童に有る程度まで中等学科を教育させる目的で創立したものもある」と紹介されている。その四機関中で、金泉面内のものは金陵学院の他に二機関あり、いずれもキリスト教教会内で実施されていた。一つは、長老教会が運営する三聖学院で、金泉面黄金町の長老教会内に設置されていた。これは、「普通教育を教授する目的で創設された」もので、「現今生徒数が男約 50 名女約 30 名」であるとされている。もう一つは、天主教会が運営する聖義学院で、同じ黄金町の天主教堂内に置かれ、「隆熙年中に設立され」、3 名の男性教員が「普通教育で男女共学制を実施」し、男子が 85 名、女子が 20 名、計 105 名の生徒がいた。いずれも、教会の一部を教室のように使い教育を実施していたようである。

これら三機関のうち金陵学院は、植民地教育行政上、「学校」としては認められない「私設学術講習会」として、毎年認可を受けながら運営されていたことが新聞報道から確認で

26 『東亜日報』1925 年 2 月 9 日。

きるが、[27]三聖学院・聖義学院も同様だったと思われる。しかし、地域ではこれらが「学校」として認められていたことが、「学校巡礼」という見出しの記事の中で、かつ、公立普通学校の紹介をした後に「私立学校」として紹介されていることからうかがえるのである。[28]

表３　金陵学院

年度	初等科（普通科）	中等科	高等科	女子夜学部	備考	出典『東亜日報』
23	100 名	100 名	100 名	100 余名	金陵学院 4 月 1 日開学。試験：3 月 20 日。女子夜学部 5 月設置。40 歳以上の婦人が多数	1923.1.29 同 3.15 同 5.26
24	3 学年制（3 クラス）		2 学年制（2 クラス）		初・高等科で 230 名募集。願書受付：4 月 3 日まで。 試験：4 月 5・6 日	1924.3.13
25	224 名		36 名		学院長：高徳煥。教員：李永局・朴元錫 金陵学院 25 年度予算：4900 円	1925.2.9 同 3.12
26				女子高等科 12 月 1 日開学	「無産青年の教養のため」、労働夜学を 10 月 22 日開学。朝鮮語・日語・算術等。授業料無料。申請期間：10 月 20 日	1926.10.12 同 11.24 同 12.3
27	4 年制（4 クラス）に変更決議		商業科目特設		労働夜学開学後 6 カ月間 80 余名の無産児童（3 月）。「今春（中略）維持会組織され連日繁昌し校内外が一新」、労働夜学生・金陵学院生徒職員 300 余名が野遊会（10 月）	1927.3.9 同 9.1 同 10.26

注 1：「初等科・中等科・高等科」は 1924 年から「普通科・高等科」となった。
注 2：実線の斜線は開設されていないことが確認できるもの。破線は未確認のもの。

（2）金陵青年会と高等普通学校期成会組織

1921 年 8 月に結成された金陵青年会が、翌年 22 年の秋には独自の会館を建設し、23 年 4 月にはその会館を利用して金陵学院を開学し教育事業を行っていたことは前項で見た。この青年会が金陵学院を始めて半年後の 1923 年 10 月には、さらに活動の枠を広げる動きとして、正規の中等教育機関を地域に設立しようとしていたことが、『東亜日報』で以下のように報道されている。[29]

> 金陵青年会主催により去る 21 日から 2 日間朝鮮館で大講演会が開催されたが、聴衆は正刻前に満員の盛況を呈した。この度の開催の趣旨として、金泉は慶北で教育の中心地になるに値するが、いまだ高等普校の設置がないのに鑑みて、同青年会では高等普通学校期成会の準備として、此の挙に及んだという。（中略）

27　『東亜日報』1928 年 2 月 17 日。
28　同様の例として、同じ慶尚北道内の達城郡月背面で 1920 年から 28 年頃まで運営された「徳山学校」も、卒業証書などに「学校」の名前を使うなど、学校としての教育を行っていたが、行政上は毎年度設立認可を受けなければならない「講習会」扱いだった（古川宣子「1920 年代大邱徳山学校――その教育実態と植民地教育行政」『朝鮮史研究会論文集』45、2007 年、参照）。
29　『東亜日報』1923 年 10 月 27 日。